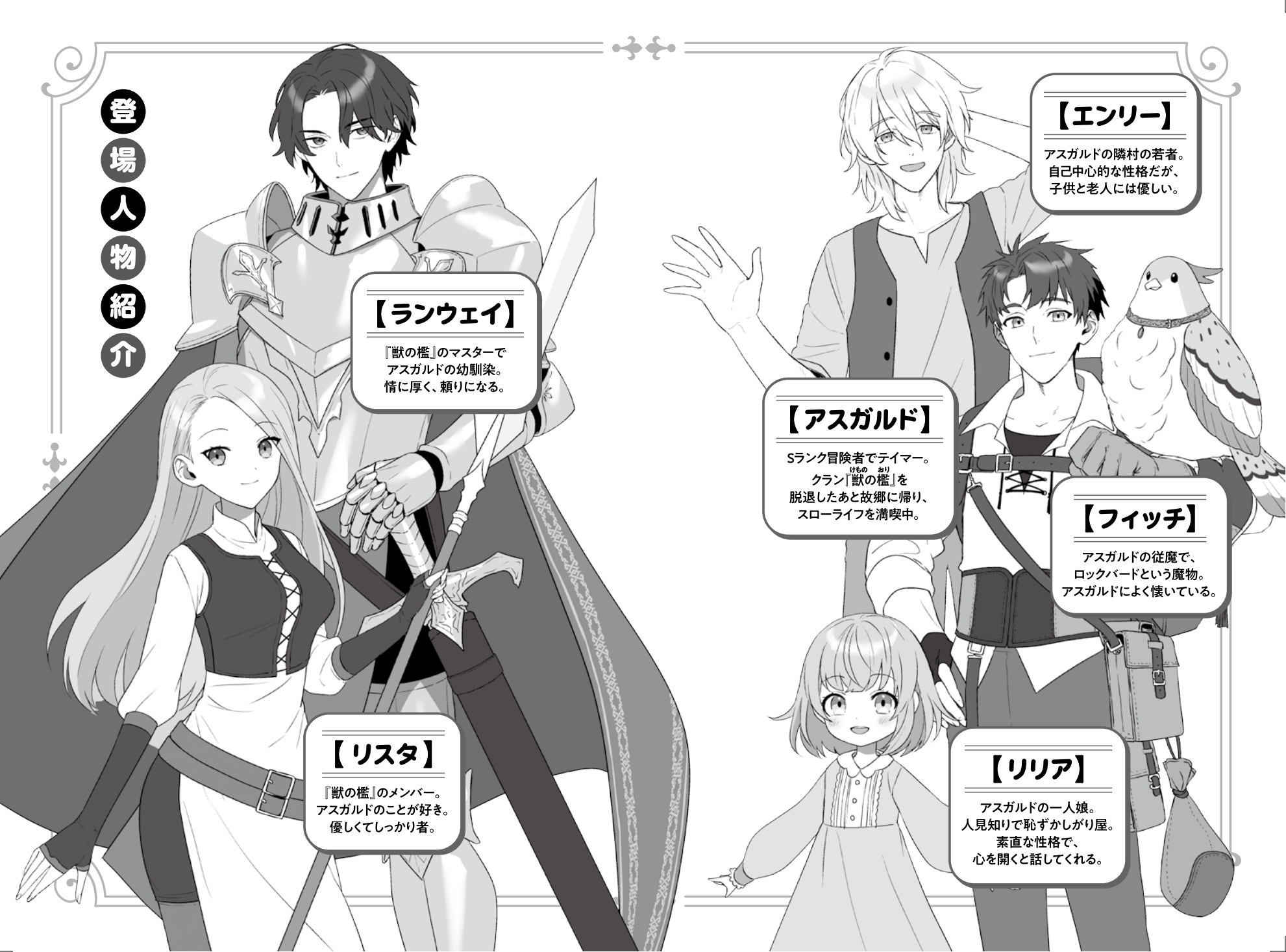
# 異世界で【まものおいしゃさん】を開業しました

元Sランク冒険者、故郷の村で一人娘とのんびりスローライフ

YINYANG
著 陰陽
絵 つなかわ


登場人物紹介
【ランウェイ】
『獣の檻』のマスターで
アスガルドの幼馴染。
情に厚く、頼りになる。
【リスタ】
『獣の檻』のメンバー。
アスガルドのことが好き。
優しくてしっかり者。
【エンリー】
アスガルドの隣村の若者。
自己中心的な性格だが、
子供と老人には優しい。
【アスガルド】
Sランク冒険者でテイマー。
クラン『獣の檻』を
脱退したあと故郷に帰り、
スローライフを満喫中。
【フィッチ】
アスガルドの従魔で、
ロックバードという魔物。
アスガルドによく懐いている。
【リリア】
アスガルドの一人娘。
人見知りで恥ずかしがり屋。
素直な性格で、
心を開くと話してくれる。

# 第一章　スイートビーのなだめ方

「アスガルド……すまないが、俺たちはお前を連れて行かないことにした」
青天の霹靂とはまさにこのことだった。
冒険者になって早十余年、テイマーの俺――アスガルドにランウェイはそう告げる。ランウェイはクラン『獣の檻』のクランマスターで、俺がパーティーを組んだ最初のメンバー、かつ幼馴染で俺の親友だ。
クランとは冒険者ギルドに所属する団体の名称のことで、最高でSランク、以下A～Cランクまでのクランが所属している。冒険者そのものにもランクがあり、一番上がSランク、以下A～Fランクまでが存在する。D未満はクランに所属することができない野良の冒険者だ。ランクが足りていても所属しない冒険者もいるが。
順調とは言えない道のりながらも、Sランクまで獣の檻が上り詰め、いよいよ、最下層まで到達した者は伝説の勇者のみ、という最高難度のダンジョンに潜る手筈となっていた。
俺もそれに備え、準備をしている最中、部屋にクランの主要メンバーが突然訪ねてきたのだ。
「俺たちは明日、目標にしていたダンジョンに潜る。メンバーは最高戦力にしておきたい。ダンジョンには一度に六人しか潜れない。だから一人でも攻撃や回復ができるメンバーが欲しい……そ

れは分かるな？」
ランウェイが静かに言う。
「――ハッキリ言って足手まといなんすよ」
主要メンバーの後ろから、ファミーアキャットの獣人、アノンがニヤニヤした顔を覗かせる。
ファミーアキャットは目の周りと耳が黒く、目元だけが人と同じという特徴を持つ。
「ちょっと、いくらなんでも先輩に失礼だよ」
槍使いのリスタがアノンをたしなめる。
俺なんかの何がよかったのか、リスタは俺に告白してきてくれた女性だ。
俺には故郷に残してきた妻と子どもがいたので断ったが、断った後も遺恨を抱かず気さくに接してくれた、俺には勿体ないくらいの美女だ。
「だってえ、本当のことっすもん。この人を追い出して、俺を代わりに入れることに、違いはないじゃないっすか」
アノンは最近クランのBランクパーティーの中でメキメキと頭角を現してきた武闘家だ。
パーティーはクランよりも小規模の数人の冒険者グループのことだ。
みんながアノンの言葉に一様に視線を下げる。
「……お前はテイマーだ。主な仕事はダンジョンの探索。俺たちがまだ弱い頃、何度助けられたか分からない。それについては本当に感謝してるんだ」
剣士のサイファーが言う。



コイツとも、割と長い付き合いだなあ。
酒に弱いメンバーが多い中で、俺とコイツは、よく潰れるまで飲んだっけ。
一緒に世界中の美味い酒を飲もう。
そう約束した日を、今でも昨日のことのように覚えている。
「けど……ダンジョンのレベルが上がるうちに、戦力にならないなって思うようになったの。テイムしてる魔物のランクが上がれば、話は別だったんだけど。アンタ、その子と別れる気がないんでしょ？　テイマーは一体しかテイムできないのに」
魔道士のサーディンが言う。
サーディンは途中参加ながらパーティーの盛り上げ役を買って出てくれた女の子。
アイテムも尽き、心が折れそうな時、最後まで諦めずみんなを励ましてくれた。
サーディンのおかげでクリアできたダンジョンが、いくつあったか分からない。
俺のテイムしている魔物はロックバードのフィッチだ。
ロックバードは岩山に群れで棲んでいるBランクの魔物だ。灰色の羽で、首の後ろと背中と胸と尻尾の一部がオレンジ色をしていて、所々黒い模様がある。
ダンジョンにもランクがあり、最低Cランクから。俺はAランク以上のダンジョンにフィッチを伴って潜るため、テイマーには珍しく自らが戦うようになった。
「知っての通り、僕たちは、ダンジョンに潜る費用を稼ぐためのBランクパーティーがあるだろ。あんたさえよければ、その……そこで……」

弓使いのグラスタが、言いにくそうに言葉を濁す。
入ったばかりの頃、右も左も分からなかったコイツに、冒険者のいろはを教えたのは俺だった。
俺を兄貴と慕ってくれた可愛い後輩。いつも笑顔で明るいグラスタが、今は悲しげに俯いている。
ダンジョンは高難易度ともなると、レアドロップがあれば黒字だが、大抵はアイテムの大量消費により赤字になる。
そのためAランク以上のクランでは、コスパのいいダンジョンに潜らせるために、Bランクのパーティーを別で稼働させている。
要するに、主要メンバーが高ランクダンジョンに潜る費用を稼ぐための、資金稼ぎメンバーにおいてくれようと言うのだ。
「そうか……すまない、俺のワガママで、フィッチを手放せなかったばかりに、お前たちに気を使わせてしまっていたんだな」
「アスガルド……」
ランウェイが呟く。
「俺は冒険者になった時から、このパーティーで戦ってきた。今更他の奴らと組む気はせんよ」
俺はそう言って微笑んだ。
「それに、そろそろ潮時かなとも思ってはいたんだ。故郷に娘を待たせているし、金も大分貯まった。これを機に、俺は冒険者を引退するよ」
それは強がりだった。



伝説のダンジョン制覇。それは冒険者なら誰しも夢見る、俺も最初に掲げた夢の一つだった。
だが、何度も俺を救ってくれたフィッチを手放せないのも、コイツら以外と組んでまで、冒険者を続けたいと思っていないのも本当だった。
ここまで……か。
かくして心が折れた俺は、最高の仲間たちを失い、失意の中、生まれ育った故郷、ルーフェンを目指すこととなったのだった。

★　★　★

「おっ、来たぞ来たぞ！」
「アスガルド！」
「お帰りなさい！」
ルーフェンの村が見える真っ直ぐな道の先で、村長をはじめとする村人たちが手を振って俺を出迎えてくれていた。
戻ると手紙を送っておいたが、まさか村人総出で迎えにきてくれるとは。
中央には、村長に肩に手を置かれた俺の娘、リリアの姿も見える。
近付いた途端、リリアは村長にしがみつき、隠れてしまった。
「おいおい、どうした？　リリア、お父さんだぞ？」

「久しぶり過ぎて照れてるんだろう。この年頃の子どもにはよくあることだ」
白髪と顔中に生やしたヒゲが印象的な村長は、小さな目を優しく穏やかに細めながら俺を見た。
「……お帰り、アスガルド」
「ただいま戻りました」
村長の変わらぬ姿に俺は涙が出そうになった。
俺は転生者でこの世界では孤児だった。
前世は日本に住んでいたが事故に遭い、一度死に、気が付くと赤ん坊になってこの村の近くの森で泣いていたのだ。
村長は俺を拾って育ててくれた親代わりで、恩人である。
そして村長はランウェイの実の父親でもある。
俺は冒険に出た先で知り合った女性と結婚したが、冒険者だった俺が、度々家をあけたことで、妻は三年前に蒸発した。以来リリアは村長のもとで育てられた。
村とリリアに稼いだ金を送るためとはいえ、仕事ばかりして長年ほったらかしたのだ。
これからリリアとの溝を埋めなくちゃならないな、と、村長にしがみついたままのリリアを見ながら思った。
「……リリアは俺がいない間、どんな様子でしたか？　その……母親を恋しがって泣いたりですとか、俺がいなくて寂しがっていたりですとか……」
「うん……そうだね……言いにくいことだが、アスガルドはほとんど家に戻ってこなかったし、母親も物心つく前に出ていってしまったからね……正直アスガルドたちを恋しがってはいなかったよ」
「そう……ですよね……」
予想はしていたが、やはりそうか。リリアは母親の顔も覚えていない。
かく言う俺も、幼馴染のランウェイの父親である村長に、冒険者で稼いでくる、を理由に預けっぱなしだったのだ。あまり母親である彼女を責められたものじゃない。
彼女はとても華やかな人だったから、こんな何もない村に、子どもと二人きりで取り残されるのが嫌だったのかもな。
「でもね、とってもいい子でお留守番していたんだよ。なあ、リリア」
村長が笑顔でそう言う。
「そうなのか？　偉かったなリリア。寂しくさせちまってごめんな。これからは、お父さん、ずっと家にいるから、たくさんリリアと一緒にいられるぞ？」
「……」
リリアは俺に、何も言葉を返さずに、けれど何か言いたげに、口をモゴモゴと動かしていた。
……まあ、今までほとんど接してこなかった人間に、いきなり父親面されても、リリアも困惑するだろう。
少しずつ、少しずつだ。リリアとの関係を、また一から構築していこう。
「――家は綺麗にしてある。いつでも使えるようになっているよ」

「本当ですか？　ありがとうございます。リリア、ずっと村長の家に寝泊まりしていたが、今日からはお前の生まれた家に住むんだぞ？　さあ、お父さんと一緒に行こうな」
笑顔で差し出した手を、リリアは握ってはくれなかった。
だけど俺が家に向かって歩いていくと、黙ってついてきてはくれる。
今はこれでいいか。
俺はリリアを連れて、久し振りの我が家へと戻った。
家を出た頃と何も変わらない。
換気もしていてくれたのか、カビ臭くもなく、シーツも新しいものが敷かれていた。
リリアはどうも落ち着かなそうにキョロキョロとしていた。
椅子を窓の近くに持ってきて、窓を開けて外を見ている。
何を見ているのかと思ったら、村長の家だった。
……今のリリアには、村長の家の方が落ち着く場所なんだろうな。
「――そうだリリア、お土産（みやげ）があるんだ。ほら、綺麗だろう？」
俺はリリアに虹色に光る綺麗な石のようなものを差し出した。
興味津々にそれを見ているリリア。
だけど俺が怖いのか、なかなか近付いてこようとはしなかった。
「これをリリアにあげるだけだ。ほら、手に取って見てごらん」
俺がそう言うと、リリアはおずおずと近付いてきて、俺の手から虹色に光る石を取って握りし

めた。
これはペリットという鳥型の魔物が誤って飲み込んだ石が、胃の中で変化してできたものだ。
ペリットはそれを時々口から吐き出して捨てるんだ。
一見綺麗に見えるが、結局のところ資産価値はゼロだ。
ただとても珍しいもので、昔近くの村の男の子にあげたら、とても喜んでいたものでもある。
だからリリアも興味を示すんじゃないかと思ったんだ。
そして案の定、リリアはペリットの石に夢中になった。
手のひらの上に乗せて、目をキラキラさせながら、嬉しそうに眺めている。
うんうん、女の子はやっぱり綺麗なものが好きだよな。
宝石はさすがにあげられる年齢じゃないし、何か他にと考えた時に、アクセサリーより、俺しか手に入れられないものの方がいいだろうと思ったんだ。
「これはペリットという鳥型の魔物が、時々吐き出すものなんだ。手に入れるのにとっても苦労したんだぞ？」
魔物がよく分からないのか、リリアはきょとんとしながら俺を見つめていた。
「ペリットは警戒心の薄い魔物だから、近付くのは訳ないんだが、滅多に吐き出さないからな。それこそ雨の日も風の日も、じーっと待ってなきゃならないんだ」
そう説明する俺を、不思議そうに見ているリリア。
「最後はペリットの群れの仲間だと思われちまって、お父さん慌てたよ」



俺がそう話すと、それがちょっと面白かったのか、リリアはクスクスと笑った。
俺もそれを見て思わず微笑む。
いったんリリアとの会話をやめ、俺は生活に必要なものを買い出しに出かけようと思ったが、村の人たちに次々と足止めをくらった。
パン、野菜、タオル、牛の乳、料理に使う炭。俺が買おうと思っていたものを次々ともらい、抱えきれないそれらで、前がほとんど見えなくなりながら家に戻る。すると、村長が笑いながら手伝ってくれた。
「……みんなお前に感謝してるんだよ。リリアを育てる金だけでなく、村のみんなが使える金を送ってくれた。こんな貧乏な村が、誰一人死ぬことなく冬を越せたのも、お前のおかげだ」
俺はただ罪悪感から、村長に預けられたリリアが、何不自由なく暮らせる環境を整えてやりたかっただけだ。
リリアだけに金を送ると、他の子どもに恨まれていじめられるんじゃないかと思っていた。
だから村のみんなで使ってほしいと多めに金を送ったに過ぎない。
だからこうして素直に感謝されると、なんだかむず痒くなる。
「……そういや、なんでこんな時間に、みんなは村にいたんですか？　普段なら、畑に働きに行ってる頃なんじゃ？」
この村は自給自足だ。近くの森や畑で採れたものを食べ、少し余ったらよそに売りに行って、その金で冬支度をして年を越す。

学校に行っている子どもはおらず、村人総出で昼間は働いているのだ。
それでようやく食べていける程度。だから村を出る人も多い。それを村人全員が冬も食べ物の心配をしなくていい金額を送っていたのだから、そこに感謝してくれているとは思うが、だからといって働かなくなるということはないはずだが。
というかそもそも平民の入れる学校がない。近くに教会でもあれば、時々そこの祭司様が勉強会を開いてくれることがあるんだが、この村の近くに教会はなかった。
たまに出稼ぎに行く男たちもいるものの、冒険者ほど稼げる訳ではないので、男も女も夜家にいる時は内職をしている。
「それが……困ったことになってな。冒険者のお前にも、ちょっと見てほしい。今からワシについてきてもらえんか？」
村長はうなだれて視線を落とした。俺は不思議に思いながら頷いた。
「リリア、村長さんがなんだか困ってるみたいだ。ちょっとお父さんと一緒にお話を聞きに行こう」
リリアを一人にはできないからな。俺がそう言うと、リリアはコックリと頷(うなず)いた。
村長は俺を森に連れて行くと、レレンの木が群生しているところまで来た。
レレンはリンゴに似た果実のなる木で、その蜜はとても甘い。冷たい温度で甘みが増す特性があり、寒ければ寒いほど、甘い実がなる。この村の重要な売り物の一つだ。
「……あれを見てくれんか」



村長は一番大きな木のてっぺんを指差した。そこには大きな巣が作られ、スイートビーという巨大な蜂の魔物が辺りをブンブンと飛び交っていた。
人里近くに現れる魔物はCランク以下が普通だ。Cランク以上の魔物を求める場合、ダンジョンに行くことになる。ちなみにスイートビーはDランクに相当する。
巨大といっても普通の蜂に比べたらの話で、そのサイズは大人の握り拳程度。
しかし、その毒針は一刺しで馬を殺す。
巣を作るところを選ばず、巣に近付くものを群れ全体で攻撃する。
何より厄介なのは、スイートビーは冬眠をしないということ。
年がら年中動き回って、人々を襲う。
スイートビーに巣を作られた村は、村を捨てて逃げ出さなくてはならなくなる、危険な魔物だと思われている。
「……長年親しんだこの村だが、大事なレレンの群生地にあんなものができてしまっては、レレンの木に近付くことすらできない。我々は畑だけでは生活できない」
村長がそう静かに言った。
俺が冒険者になる以前も、この村がギリギリなんとかなっていたのは、レレンの木があればこそだ。
畑の作物はそのほとんどが村人たちが暮らすためのもので、売りに出せる量はたかが知れているからな。

「しかも、その畑にすら毎日スイートビーが現れて、畑仕事もままならん。冒険者ギルドに討伐を頼みたくとも、金がない……この村を捨てなくちゃならん。悲しいことだ」
村長は目を閉じ、涙を堪えているようだった。
俺の隣でじっと話を聞いていたリリアも、村長の様子を見て、悲しそうに眉を下げている。
「……そんちょうさん、なかないで？」
リリアは村長に近付き、服の裾を引っ張って見上げた。
村長はそんなリリアに目尻を下げ、腰を曲げてしゃがみ、「ありがとうな、リリア」と言った。
リリアは心配そうに、村長の頭をイイコイイコして、撫でてやっていた。
「……村長、リリアをとっても優しい、いい子に育ててくれて、ありがとうございます」
俺は思わずそうお礼を言った。
「なあに、お前の血を引いているからさ」と村長は笑った。
俺はランウェイと幼い頃、この木に登ってレレンの実を食べ、大人たちに怒られたことを思い出していた。
俺は冒険者を辞め、その収入が今後村に入らなくなる。
レレンの木まで手放すことになってしまえば、ルーフェンの村はたちまち生活がたちゆかなくなることだろう。
「……ん？　っていうか、討伐？　――って、いやいや、討伐しなくとも、なんとかなるぞ？」
「どういうことだ？　ワシに分かるように話してくれんか」



「……村長、みんなに言って用意してもらいたいものがあるんです。なあに、すぐに解決してみせますよ」
半信半疑な村長に、俺はニカッと笑ってみせた。
俺が村人に用意してもらったものは、ナイフ、斧、軍手、木でできた桶をいくつか、それとハシゴだった。
「それ……なににつかうの？」
リリアが自分から俺に話しかけてくれた！
俺は嬉しくなって微笑むと、「スイートビーを退治しないで、どうにかするためのものだよ」と答えた。
「……それをしたら、そんちょうさんなかない？」
「ああ、そうだな。みんな泣かなくて済むようになるよ。まあ、見ててごらん。すぐに分かるさ」
俺はハシゴを使って木のてっぺんにある巣まで近付く。
巣の周りでは、スイートビーたちが警戒しながら、ブンブンとうるさく飛び回っていた。
至近距離に魔物がいても恐れない俺を、村人たちが遠巻きに見ている。
俺は思い切り巣に斧を突き立てた。
スイートビーたちが一瞬で攻撃態勢に移り、俺に襲いかかった。
村人たちの悲鳴が上がる。

だが俺は落ち着いていた。
俺の周囲を飛んでいたフィッチが、スイートビーを追い払う。フィッチはBランクダンジョンで活躍していた魔物だ。こんな人里近くに現れる魔物など、百体いたって敵じゃない。
俺は巣の一部をナイフで削り取ると、その下に桶を当てた。
削った部分からトロトロと濃厚な蜂蜜が溢れ出る。
黄金色に輝く液体は、まさに食べる宝石といった感じだ。
俺は桶がいっぱいになる頃に、「おーい、誰か受け取ってくれないか？　フィッチがいるから、魔物は大丈夫だ。それと新しい桶を持ってきてくれ」と叫んだ。
みんなが互いを見回し、一番若い少年が、母に背中を押されて、新しい桶を手に、半ば転げるように前に出た。
少年は戦々恐々としながら、俺から桶を受け取ると、素早くその場を離れた。
スイートビーは素早く動くものを攻撃する習性がある。
スイートビーの一部が少年に向かって行き、それをフィッチが防ぐ。
次の桶もいっぱいになり、再び桶を受け取りにきた少年に、俺は「ゆっくり動いた方が襲われないぞ？」とアドバイスをした。
すると、リリアも近付いてきて、新しい桶に手を伸ばして受け取りたがった。
「――やってみたいのか？　リリア」
そう聞いてみると、こっくりと頷くリリア。



「そうか、でも、たくさん入れると、とっても重たいからな、リリアは少しにしておこうな。ほら、桶を持ってきてくれ」
リリアはまだ小さいからな。
蜂蜜をたっぷり入れた桶なんて持ったら、歩けなくなっちまう。
ほんの少し、桶に五分の一ほど蜂蜜を入れたものをリリアに渡し、リリアから代わりの桶を受け取った。
「ありがとうな、リリア。気をつけて運ぶんだぞ？」
リリアは力いっぱいコクッと頷くと、それでもちょっと重たいのか、えっちらおっちら桶を両手で持ちながら、みんなのところに運んだ。
リリアが勇気を出したことで、大人たちも怖がっている場合じゃないと思ったのだろう。代わる代わる桶を持ってきてくれた。
用意してもらった桶だけでは足りなくなり、家から追加で持ってきてもらう。
桶七つを満タンにし、巣から流れる蜂蜜がようやく止まった。
俺は村人たちを連れて村に帰った。
「……あんなことして大丈夫なの？」
「奪われた蜂蜜を取り戻そうと、スイートビーが、襲ってくるんじゃ……」
美味そうな蜂蜜には惹かれるが、それを村に置くことには反対、といった空気がみんなの間に漂う。

「大丈夫だよ、これで女王が落ち着くから」
「どういうことなんだ？」
先程から半信半疑だった村長が俺に尋ねる。
「……どうして？」
リリアも俺に尋ねてきた。
とっても不思議そうで、興味津々な様子だ。
俺はニッコリと微笑むと、「スイートビーはとても不器用な頑張り屋さんなのさ。頑張って蜂蜜を集めるんだけど、たまに集め過ぎて、女王の部屋まで蜂蜜でいっぱいにしちゃうんだ」と言った。
「そうなの？」
リリアが驚いたように、感心したようにそう言った。
花のない畑にまで現れた理由がそれだ。普段は決してそんなことはしないからな。
「考えてごらん？　女王が自分の部屋にオシリを入れたら、蜂蜜でベッドがビッチャビチャ。そりゃあスイートビーの女王だって怒るだろう？」
「オシリがビッチャビチャ……」
そのキーワードに、リリアと子どもたちがぷぷっと笑い出す。
「女王が怒ってストレス成分を出すと、それにやられたスイートビーたちは、花のないところにも現れて、近くで動くものを襲うようになるんだ」
「そうだったのか……」



誰ともなく村人がそう言った。
「ああ。だから巣を壊して、蜂蜜を取ってあげれば、女王のストレスがなくなって、スイートビーたちは落ち着く。しかも巣を直すのを優先して、中も掃除するから、人を襲わなくなるんだよ」
初めてこのことを知った時、魔物といえど、そこで暮らす一つの命で、むやみに人を襲う訳じゃなく、ただ自分たちの生活を守ってるだけなんだなあ、と思った。
「あとは巣箱と遠心分離機を作れば、養蜂（ようほう）ができるぞ？」
村人たちが、わあっと歓声を上げる。
「スイートビーの巣からは一か月に一回蜂蜜が採れるから、それを売ったり加工したりしたら、それで商売ができるし、レレンの木は今はスイートビーにあげちまおう？」
「……レレンの実は、もう食べられないの？」
子どもたちが心配そうに俺を見上げる。
リリアもそれがとても心配なようだ。
娯楽の少ない貧乏なこの村じゃ、子どもにとっても大人にとっても、甘いレレンの実は貴重なデザートだからな。
「いや、スイートビーがレレンの木に集まるのは、レレンの花が咲いている間だけさ」
「そうか、レレンの木が実をつけて、蜜が取れなくなれば、別の花に移動するって訳だな？」
「ああ。その時スイートビーが巣を移していれば、レレンの木の巣を壊せばいい」
俺は村人の言葉にコックリと頷いた。

「花が萎めば、新しい巣に引っ越して、レレンの木に近付かなくなるからな。養蜂用の巣箱を安全なとこに設置すれば、蜂蜜も取れるしみんなも自由にレレンの実を取りに行けるようになるよ」
わあっとみんなが沸く。リリアは年齢の近い子どもたちと微笑み合っていた。
スイートビーで養蜂をすると何が凄いかというと、取れる蜂蜜の量がかなり多い。普通の蜜蜂は年に数回か、少ないものだと一回しか蜂蜜が取れない。
それをスイートビーは月に一回取れるほど集めてしまうのだから、どれだけ優秀な頑張り屋さんかが分かるというものだ。頑張り過ぎて女王のベッドをビッチャビチャにしてしまうほどに。
しかも冬眠しないので冬にしか咲かない花の蜜も集めてくれ、季節ごとに違う花の蜂蜜を楽しむことができるのだ。
俺は村人たちに巣箱と遠心分離機の製作方法について話をし、それからスイートビーの蜂蜜を食べてみることにした。
糖度の高い実をつけるレレンの花の蜂蜜。これはもう期待しかなかった。
俺は蜂蜜を一口、スプーンですくって食べた。
「〜〜〜〜!!」
口の中でさらりと溶ける。濃厚なのに爽やかな甘み。
ほんの少し鼻に抜ける、レレンの香り。これは本当に蜂蜜か？
俺は正直蜂蜜というものがそこまで好きではない。
舌に乗せた時の、まとわりつく感じが苦手で、甘みが強く美味しいのだが、そこまで食べたいものでもない。
だがこれはそういうのが一切なく、まるで飲み物を飲んでいるかのようにグイグイ食べてしまう。
ドリンクにして売れるかもしれない。
思わず何杯も口に運んでしまい、村長が俺をたしなめた。
順番を待っている子どもたちが、ジトッとした目で俺を見ている。
俺は咳払いをすると、「――最高だ」と言った。
みんなは一気に興奮すると、次々と自分の家からパンを持ってきて、塗って食べ始めた。
「リリア、ほら」
俺もパンに蜂蜜を塗って、リリアに差し出した。
リリアはそれをおずおずと受け取ると、恐る恐る小さなお口で一口パクッと食べる。
するとびっくりしたのか、目がまん丸になって愛らしい。
とても美味しかったようだ。
みんながどんどんパンを持ってきて、蜂蜜を食べ尽くしそうな勢いだ。
「オイオイ、ちょっと待て。パンで食べるのなら、美味い料理があるぞ？」
俺は村人とリリアを引き連れて自宅に戻る。家の中に入りきらない人には外で待ってもらう。
ボウルに牛の乳、卵を入れて泡立てると、それをザルで濾した。
濾すことで、混ざりきらない卵白やカラザが取れて、卵液がより滑らかになる。
「ほら、リリア、やってごらん？　このフォークでパンに穴を開けてくれ」

パンとフォークをリリアに差し出す。面白そうだと興味を持ったのか、リリアが素直にフォークを受け取った。
俺は左腕でリリアを抱え上げて、右手で椅子を持ってきてテーブルの前に置き、リリアをその上に座らせてやった。
リリアはプスプスとフォークでパンを突き、卵液を染み込ませやすくしている。
その次はフライパンにバターを塗ってから、こんがり焼き目がつく程度に卵液に浸したパンを焼く。
最後にスイートビーの蜂蜜をたっぷりとかけた。
「スイートビーのハニーフレンチトーストだ」
俺が村人にフレンチトーストを配ると、みんながアチチチ、と言いながら頬張る。
砂糖が貴重なこの国では、甘いものは滅多に楽しむことができない。
みんな笑顔で楽しそうにしている。
こうなると、俺はもう一品作りたくなってきた。
「誰か、何人か野菜のスープを分けてくれないか？　野菜の種類は違う方がいい。あと、鶏の肉と骨が両方欲しいんだが。ああ、クズ肉なんかもあるといい」
何をするんだ？　と一様に不思議そうな顔をしながら、村人たちが各家庭で作った野菜のスープを少しずつ持ち寄ってくれる。
この世界は調味料が少ないので、ほんの少しの塩でしか味付けされていない。



野菜は各家庭ごとに違っている。
俺は野菜を取り除くと、スープだけを集めて、クズ肉と骨を一緒に鍋にぶち込んだ。
グツグツと煮えている。ほんとはローリエとかあるといいんだけどな。
「――ふきんを取ってくれ」
俺は別の鍋に、ザルを引っ掛けると、ザルの上にふきんを敷いた。丁度いい感じにふきんがザルに引っ掛かっている。
そしてそこに、火にかけていた鍋の中身をゆっくりと入れた。
空っぽだった鍋には、クズ肉や骨がふきんで取れて、綺麗になった薄茶色の液体が入っている。
「これは何？」
野菜スープを持ってきてくれた女性の一人、ラナが鍋を覗き込みながら尋ねる。
「俺、特製のスープさ」
作り方は至って簡単だ。肉と野菜と塩コショウを入れて煮るだけ。コショウはなくてもいい。
それだけで立派な一つの料理になるのだ。
俺は更にスープに、一口大に切った鶏肉、生姜を一欠薄切りにしたもの、蜂蜜を大さじ一杯入れて煮た。
ほんとは醤油とか料理酒とかあるともっといいんだけどな。まあなくてもそれなりに美味い。
蓋をして中火で三分ほど煮て、かき混ぜて更に二分。
リリアはお手伝いに目覚めたのか、やってみたいというので、かき混ぜるのを手伝ってもらった。

お玉を持つリリアの手を上から握ってサポートしたが、リリアは嫌がることなく一緒に鍋をかき混ぜてくれた。
ほんの少しリリアとの心の距離が縮まったような気がした。
「さあ、食べてくれ。鶏肉の生姜蜂蜜煮だ」
俺が料理を配ると、みんなはゴクリと唾を飲み込んだ。そして、バクバクと食べ始めた。
「……美味しい！」
「柔らか～い」
「蜂蜜が料理にも使えるなんて……」
「野菜のスープがここまで変わるのか⁉」
みんな、煮汁まで飲んでいる。
たくさんの野菜の煮汁を合わせたスープは、そのままでも美味しいし、こうして他の料理にも使えて便利だ。
みんなの満足そうな顔に、俺も満足だった。
食べたあとはみんなで瓶を煮沸消毒して蜂蜜をその瓶に詰めた。
俺は温めた牛の乳にほんの少し蜂蜜を混ぜると、まだこの蜂蜜を楽しんでいない赤ん坊に差し出した。
母親のエレンは戸惑った表情をして、それを受け取らない。
「あの……うちの子は、まだ一歳になったばかりだから、牛の乳は大丈夫でも、蜂蜜は無理だと思



うの」
「いや、この蜂蜜は大丈夫なのさ。騙されたと思って飲ませてごらん」
蜂蜜というのは、ボツリヌス菌を含んでいる可能性がある。
ボツリヌス菌は熱に強く、調理で菌が死なず、腸内環境の整っていない、一歳未満の子どもに与えてはいけないとされている。
だが、このスイートビーの蜂蜜の凄いところは、スイートビーがボツリヌス菌を殺してしまうことにある。
スイートビーには動物のような内臓がある。だから菌にやられることもある。
自分たちの子どもに食べさせるものなのだから、危険なものは与えられない。
進化の過程で菌を殺す方法を生み出したのだ。
これは貴族や王族の間では広く知られ、この国の王は代々栄養豊富なスイートビーの蜂蜜を食べて育つ。
「さすがだな、アスガルド。とても魔物に詳しいんだな」
村長が微笑みながら言う。
「冒険者なら初心者じゃなければみんな知っていることです。討伐しないと生活できないから、対処法をわざわざ依頼人に教えないってだけで」
この世界の平民たちは学校に行かないので、魔物や動物の知識を学ぶ機会がない。俺は転生者でSランクのテイマーだから、人より知識が豊富ではあるが、一定レベルの冒険者であれば、俺と同

じことができる。まぁ、魔物の声を真似して、意思の疎通がとれるのはテイマーだけだがな。
「――それはどうするの？」
俺が瓶に詰める用とは別に分けておいた蜂蜜を見て、村人の女性――ニナイが聞いてくる。
「ああ……これはな。おーい、ザンギス、ちょっと手伝ってくれないか？」
俺はザンギスを呼んだ。今日は俺が帰ってくるというので休みを取って村に戻ってきてくれたが、ザンギスはいつもは酒工房へ出稼ぎに行っている。
「これは、酒にしようと思ってるんだ」
実は人類最古の酒は蜂蜜酒と言われている。
蜂蜜に酵母を加えて発酵させて、酒を作ろうと思っている。
水の代わりにレレンの果汁と合わせたら、それは美味い酒ができるはずだ。
しかも、男の子ができやすいという言い伝えがあるため、後継者が欲しい王族や貴族は初夜に蜂蜜酒を飲むのだ。きっと高く売れることだろう。
「スイートビーの蜂蜜と蜂蜜酒。コイツを売れば、冬を越すどころか、みんなの新しい服も買えるし、蓄えだってできる。どうだ、みんな手伝ってくれるだろ？」
みんなは笑顔で互いの顔を見比べた後、「もちろんだ！」と大声で答えてくれた。
そのために、まずはスイートビーに巣を移してもらう必要がある。
巣箱の材料は森で取ってこられるが、釘なんかは街に買い出しに行かなくてはならない。
俺が金を出してもいいのだが、みんなで使うのだから、スイートビーの蜂蜜を少し売って金を作



ろうということになった。
「街か……久し振りだな」
俺は懐かしい商人の店を尋ねることにしたのだった。

★　★　★

次の日、俺はリリアと連れ立って、王宮の近くの街の道具屋に来た。
二人だけでどこにも出かけたことがなかったのと、一度街を見せておきたいと思ったからリリアも連れてきた。
うちの村は馬車がないので、当然街までは徒歩だ。
小さいリリアにはちょっと距離が遠すぎるので、肩車をして歩いた。
最初ちょっと遠慮気味というか、抵抗するそぶりを見せたが、いざ肩車をしてやると、リリアはキャッキャと喜んだので思わずホッとしたのだった。
ここの道具屋はとにかくデカい。釘や金槌などの日曜大工品から飼料まで。
五階建てのレンガ造りの建物の中に、ジャンルごとに分かれて様々な商品が並べられ、冒険者から街の人たちまで、様々な利用者がいる。
冒険者をしていた時、色んな街を回ったが、王宮に近いこの店より品揃えの多い店はない。
男からすると見て回るだけでも楽しいのだが、果たしてリリアがどう感じるかは分からなかった。

だが心配はいらなかったようだ。
リリアは店に入った途端、目をキラキラさせて店内を見回すと、急に走り出してしまった。
「危ないぞリリア！　人とぶつかる！　お店の中では静かに、ゆっくりだ。他の人の迷惑にならないようにな」
たしなめなくてはいけない程度には、リリアはこの店に興味を持ったようだった。
目的の場所へ歩いていると、リリアが突然、食器のコーナーで立ち止まった。
イチゴのような実がたくさんあしらわれたデザインのグラスがそこには置かれていた。
気に入ったのかな？
「リリア、それが気に入ったのか？」
リリアは振り返って、こっくりと遠慮がちに頷いた。
「じゃあそれも買って帰ろうか。新しい生活の記念に、お父さんもお揃いのグラスにしようかな」
俺はそのグラスを二つ手に取った。
これから選ぶものとまとめて会計しようと思ったのだが、リリアはグラスが気になって仕方がないらしい。
先にグラスの会計をすると、「ほら。それを持って走って転んだら危ないからな？　しっかり持って、ゆっくり歩きなさい。大切にするんだぞ？」とグラスの一つをリリアに手渡した。
リリアはそれをしっかりと抱きしめて、ニコニコと嬉しそうに見つめている。
それから必要なものを買うために店の中を歩いた。



リリアの歩幅はとても狭いので、かなりゆっくりな速度になったが、まあ、急ぐ訳でもないしな。
とても楽しそうなリリアの姿を見ているだけで、俺は胸が温かくなる。
そうしてようやく目的の場所に到着した。
リリアにあまり俺から離れたところに行かないよう言って、チラチラとリリアの様子を見ながら、品物を選んだ。
俺は巣箱の材料の他に、身隠(みかく)しのローブを数枚手に取った。
これはCランク以下の魔物からなら完全に姿を隠すことができる。初心者が魔物から逃げる時にも使えるし、これを使った一般人向けのダンジョン探索ツアーも人気だ。
これを使えば誰でもスイートビーの巣箱に近付けるようになる。
スイートビーの養蜂には欠かせないアイテムだ。
俺が身隠しのローブを選んでいると、リリアより少し年上くらいの、高価そうな服に身を包んだ男の子が、悲しげな目でローブを見上げていた。
すぐに白髪の執事(しつじ)のような男性が迎えにきたので、おそらくどこかの裕福な商人か、貴族のお坊ちゃんなのだろう。
俺が選んだものを会計に持って行くと、高ランクの冒険者だと気づいた店員がカウンターの奥に入り、顔馴染みの店長、ニマンドを呼んでくれた。
「久し振りだな、元気そうじゃないか。冒険者を辞めたって本当なのか？」
「ああ、そちらこそ息災で何よりだ……まあ、ここらが潮時だと思ってな。今は村に戻ってるよ」

「その子がリリアちゃんかい？　こんにちは。おじさんはお父さんの友達なんだよ？」
リリアがコクッと小さく頷いて挨拶する。
「それで？　今日は何を買うつもりなんだ？」
「実はスイートビーの養蜂を始めようと思ってな。既に蜂蜜は取れているから、それをこれから売りに行くつもりだ。商人ギルドは街の入り口の反対側だから、先にこっちに寄ったんだ。すまないが、金を払うのはその後でもいいか？」
「ああ、もちろんだ。こちらで預かっておくよ」
ニマンドが、荷物を預ける用の受付に置いた品物を奥で管理しておくよう、店員に告げる。
「……おじさん、スイートビーを飼ってるの？」
声のした方を振り返ると、さっき身隠しのローブを悲しげに見上げていた男の子だった。
「飼ってる訳じゃないんだが、おじさんたちのお仕事に使うんだ」
「そっか……魔物を飼ってるなら話が聞きたかったの。ごめんね」
あまりに悲しそうなその様子に、俺とニマンドは顔を見合わせる。
俺は男の子の目線までしゃがむと、「……何が聞きたいんだ？」と優しく尋ねた。
「ルクシャ様！　こんなところにいらしたのですね？　じいから離れてはいけませんと申し上げたではないですか」
先程男の子を迎えにきた、執事のような服装の男性が、慌てた様子でこちらに駆けてくる。
「ご迷惑をおかけして大変申し訳ありません。私はガウリス、ベルエンテール公爵（こうしゃく）にお仕えしている執事です。この方は小公爵のルクシャ様です」
やはりいいとこの子だったか。小公爵ということは後継者だな。
「いや、特に迷惑はかけられてないぞ。何か俺に聞きたいことがあるようなんだが、話を聞いてやってもいいだろうか？　俺はSランク冒険者のアスガルドだ」
俺の冒険者登録は消していないので、引退した身とはいえ現役の冒険者扱いだ。
要するに、身分証明書代わりなのだ。
ルクシャくんは俺とガリウスさんの表情を交互に見比べる。ガリウスさんがコックリと頷いたのを見て、ルクシャくんは安心したような表情を浮かべた。
「……あのね、うちで飼ってる、ガラファンの様子がおかしいの。大人しかったのに、急に暴れ出したの」
ガラファン……!!
ガラファンはCランクのダンジョンに棲息する、ゾウのような鼻を持つ、毛むくじゃらの魔物だ。
ゾウのような長い牙はなく、代わりに爪がとても長い、ゾウとクマの間（あい）の子（こ）みたいな感じだ。
自分からあまり人を襲わない魔物とはいえ、よく飼う気になったものだ。
お貴族様の考えることは分からんな。
「アスガルドはSランクのテイマーで、魔物についてはとても詳しいのです。どうだ、アスガルド。一度見てやっちゃくれないか？　ベルエンテール公爵家はうちのお得意さんでな。もし行ってくれるなら、さっきの商品、オマケしとくぜ？」

ガリウスさんとルクシャくんのあとに俺を見てニマンドが言う。
公爵家をお得意様にしているとか、ニマンドはかなり手広く商売をやっているんだな。
貴族の出入り商人になるには、かなりの実績と、上位商人からの保証が必要だと聞いたことがある。
「別に俺は構わんが……どうする？」
俺はルクシャくんの保護者であるガリウスさんに尋ねた。
「……大変急なお願いで恐縮ですが、当家にいらしていただけませんでしょうか？」
ガリウスさんは眉を下げながら、遠慮がちにそう言った。
「ルクシャ様はダンジョン探索ツアーで見かけたガラファンを連れて帰ってしまったことに、大変責任を感じていらっしゃいます」
ガリウスさんは目を伏せながら言った。
「一度人に飼われたガラファンを、ダンジョンに戻すことはできません。このままですと、処分することに」
「分かった……俺にできるか分からんが、一度見てみよう」
俺がそう言うと、ルクシャくんの表情がパアッと明るくなる。
「近くに当家の馬車を待たせております。そちらで参りましょう」
そうして俺たちはベルエンテール公爵家へと向かうことになったのだった。



ベルエンテール公爵邸は広大な土地を持つ大豪邸だった。
使用人の住まいがあるエリアだけでも、俺たちの住むルーフェンの村が、五つは入りそうな広さだ。
「こちらです」
ガリウスさんの案内で、裏庭の山を登る。ここでガラファンを放し飼いにしているらしい。
「ルクシャ様がまだ幼い頃にガラファンをダンジョンから連れ帰ってきて、それからずっととても可愛がっておりまして……」
先導して登りながら、ガリウスさんがそう説明してくれる。
「ルクシャ様が餌を持っていっても警戒しなくなったり、毛づくろいを黙って受けるようにもなったりして、それこそ一緒に昼寝などもして、日々良好な関係を築いていたのですが……」
「それはダンジョン内の魔物を連れてきたにしちゃ、いい方の反応だと思うぞ。普通は自分のテリトリーから連れ出された魔物は、ずっと警戒したままで心を許さないんだ。テイマーでも雇っているのか？」
「いいえ、つけた方がよろしかったでしょうか？」
困惑したようにガリウスさんが言う。
「ガラファンが凶暴になってからも、ルクシャ様はご自分で餌を運んで話しかけていましたが、まずかったでしょうか？」
「そりゃあそうだ！　テイマーもなしに魔物を子どもに近付けるなんて自殺行為だぞ？　よく今ま

で無事だったな？」
「幼体の時に連れてきたのがよかったのでしょうか。ルクシャ様がガラファンを気に入られて連れて帰りたいとおっしゃった時、捕獲を依頼した冒険者からは、特に何も言われなかったのですが……」
「そりゃあ捕獲だけが仕事だからな。その先のことは聞かれない限り言わない。まさか飼うつもりだなんて、思ってもみなかったのかもしれないしな」
実際、幼体だからよかったのだろう。
特に周囲に仲間や親がいなければ、教わる相手がいないからまだ人間は攻撃してくるものだという警戒心がない場合も多いからな。
教えてくれる仲間や親がいない場合は、攻撃されて初めて人間を怖がったり、警戒したりするようになるんだ。
昔、俺がテイムしていた魔物もそうだったからな。
幼体をテイムしたことは何度かあるが、やはり成体をテイムするよりも楽だったことを思い出す。
「今まで大丈夫でも、今後何があるか分からない。テイマーは雇った方がいいと思うぞ」
「かしこまりました。そのようにさせていただきます」
ガリウスさんが胸に手を当てる。
「僕、小さい頃からガラファンにいっぱい遊んでもらったんだ。僕はまだ大好きなのに……もう僕のこと、嫌いになっちゃったのかな……」



ルクシャくんが寂しそうにそう呟いた。
「おとうさん、あの子かわいそう」
リリアが俺のズボンをクイッと引っ張った。
「リリア……今俺のことをお父さんと言ったのか？」
俺がそう言うと、リリアは少し恥ずかしそうに頬を染めて俯いた。
「リリア……」
胸がジーンとなりながら、俺はリリアを見つめた。
リリアは何か言いたげに俯いたまま、ジッと押し黙っていた。
「……あの子をたすけてあげられる？」
ポツリとそう言うリリア。
「ああ、もちろんだ、お父さんに任せておけ」
俺はドン、と拳で胸を叩いた。
「……あれです。気が立っているのでお気をつけください」
ガリウスさんが立ち止まった。
広い草むらをガラファンがウロウロしている。
魔物は一見雌雄が分かりづらいが、ガラファンは毛の色で判別できる。
くすんだオレンジ色をしているから、あれはオスだ。
「……ああやって一日中うろついて、人を寄せ付けません。メスの方は日に日に元気がなくなって

いきますし、このままでは処分しなくとも死ぬかもしれません」
「――番なのか!?」
俺は驚いてガリウスさんを見る。
「なあ、この近くにナナカンの木はあるか？　それと最近――」
俺はガリウスさんに耳打ちをする。
子どもたち二人が不思議そうに俺たちを見上げた。
「はい、その通りです、何故お分かりになったのですか？」
満足した顔で頷く俺を、ガリウスさんが不思議そうな表情で見る。
「エンダー」
ルクシャくんがガラファンに呼び掛けたが、それに気付いたオスのガラファンが、「ガアッ」と吠えて威嚇してくる。
ビクッとして下がるルクシャくんを、ガリウスさんが庇う。
リリアも怯えて思わず俺の後ろに隠れて、俺のズボンを握った。
俺はこの大切な宝物を、何があっても全力で守ろうという、愛おしい気持ちで心がいっぱいになる。
「やはり処分しなくてはならないでしょうか……」
「処分？　――って、いやいや、それ、処分しなくとも、なんとかなるぞ？」
「本当ですか!?」



「ああ、ちょっと頼みたいことがあるんだが、今から言うものを持ってきてくれないか？」
俺はニヤリと笑みを浮かべた。

俺がガリウスさんに持ってきてもらったのは、大きめのボウルが二つと牛の乳を二リットルほど、お玉、そして剪定バサミだった。
「こんなものを何にお使いに？」
ガリウスさんは不思議そうにしながら、俺にそれらを渡した。
「まずはナナカンの木の群生地に案内してくれ」
俺は草木を掻き分け、ナナカンの木の群生地の前に立つと、「本当に切り落としていいんだな？」とガリウスさんに尋ねた。
「奥様に許可はいただきました。ルクシャ様のためであれば、切ってしまっても構わないとのことです」
俺は丁寧に葉のついている枝だけを切り落とす。
「……この木が原因なのですか？」
「これも原因の一つだな……ナナカンの木は、とある薬の材料になるんだが、その効能を求めて出産後のガラファンのメスが葉を食べることがあるんだ」
「ガラファン、あかちゃんをうんだの？」
リリアがそう尋ねてくる。

「ああ。そうらしい。落ち着いてからなら、遠くからガラファンの赤ちゃんが見られるかもしれないぞ？」
「あかちゃん、みたい……」
リリアが興奮したように頬を染めてそう言った。
「また来させてもらえるよう、お父さんがお願いしてみよう」
「ほんと？」
リリアが嬉しそうに微笑んだので、俺もとても嬉しかった。
「薬……ですか。ガラファンのメスはなんの病気にかかっているのですか？」とガリウスさんが尋ねてくる。
「――いや、ダイエットのために食べるんだよ」
「ダイエット⁉　ダイエットですか？　な、何故魔物がダイエットなど……」
「生きるために必要だからな」
俺はガラファンがダイエットをする理由と、そもそものガラファンの生態を、みんなに話して聞かせた。
ガラファンの発情期は秋だ。
幼体は、親の巨体に似合わず、わずか五百グラム程度で生まれてくる。
妊娠したガラファンは出産に備えてたくさん食べて脂肪を蓄え、蓄えた脂肪を使いながら、冬の間巣穴にこもって春先に出産する。



溜めた脂肪から母乳を作るため、腹の中の子どもを育てることにはあまりエネルギーを使わず、それでとても小さな赤ん坊が生まれてくるのだ。短いと二か月程度しか妊娠の期間がない。
だがその時蓄えた脂肪が減らない個体が存在する。
ガラファンの妊娠時、増える体重はなんと二百キログラム。
冬ごもりと母乳に脂肪を使っても、体重が半分も減らなかった場合、筋肉が自分の体重を支えられなくなってしまう。
そこでナナカンの木だ。
ナナカンの木の葉っぱは、満腹中枢を刺激し、食べる量を減らす効果がある。
貴族の女性に人気で、自宅に植えて専属の薬師に調合させている人も多い。
これを食べることで、体重が減らなかったガラファンは体を元に戻す。
体重が戻れば通常は食べるのをやめるが、妙にナナカンの木の葉を好む個体がいる。
普通は食べ続けることで効果を失うはずが、まれに効き続けてしまう個体がいるのだ。
ナナカンの葉は栄養がほとんどない。
ましてやナナカンの効果で腹いっぱいだと勘違いしているため、他のものを食べない。
しばらくは脂肪があるから大丈夫だが、やがて倒れてしまう。
ガラファンはとてもパートナー思いの魔物で、生涯同じパートナーとしか子を成さない。
弱ったメスと、生まれたばかりの子どもを守るため、オスは気が立っていたという訳だ。
「ナナカンの葉を切り落としたから、これでガラファンのメスは他のものを食べるようになるはず

だ。妊娠、出産と体力を消耗したところに、ナナカンの葉のせいで栄養が足りていない。胃も弱っているから、最初はたっぷりの牛の乳から始めて、たくさん餌を用意してやってくれ」
「かしこまりました」
「――にんしんってなに？」
そうリリアが尋ねてくる。
出産は分かっているのに、妊娠は分からないのか。村で子どもを生む女性たちがいるから、赤ちゃんが生まれることは分かるのかな。だが性教育は大切だからな。
とはいえ俺は思わずギョッとしながら、なんと答えたものか思案した。
「うーん、そうだなあ。お腹の中で卵を育てること、だな」
「おなかのなかで、たまごをそだてる……？」
「ああ。魚や鳥が卵を産むことは知ってるか？　リリア」
リリアがコックリと頷く。
「あれは体の外に卵を出して、外で赤ちゃんを育てる生き物なんだ。でも、人間もガラファンも、本当は卵があるんだぞ？」
「そうなの⁉」
「ああ。鳥みたいに硬くて丈夫な卵じゃないから、体の外に出して育てることができないんだ。だからお腹の中で赤ちゃんを育てるんだよ。それが妊娠だな」
「ふうん……分かった」



リリアはそう言って頷いた。
俺はすべての葉を切り終えると、ガラファンのところへと戻った。
そしてボウルの中に、牛の乳を半分と、売り物にするために持ってきたスイートビーの蜂蜜をたっぷりと入れ、お玉でかき混ぜる。なんでもいいから混ぜるのに使えるものをと言ったらお玉を持ってこられただけで、特にお玉でなくてもいい。
「フォウッ！　フォウッ！　フォウッ！」
俺は、敵じゃないぞ、攻撃の意思はないぞ、ということをアピールする時の、ガラファンの鳴き声を真似る。ゆっくりと近付き、オスの前に蜂蜜入りの牛の乳の入ったボウルを置いた。
オスのガラファンがビクッとする。
スイートビーの蜂蜜は栄養が豊富で、ガラファンの大好物だ。
味方をアピールされたあとでこれを出されたら警戒を緩めてくれるだろう。
ガラファンのオスがボウルに頭を突っ込んで牛の乳を飲み始めた。
これなら大丈夫だ。俺はオスのガラファンの後ろに回ると、背の高い草を掻き分けた。
そこは洞穴（ほらあな）だった。奥に進むと、メスのガラファンと二体の幼体がいた。
メスはかなり弱っているのか、ぐったりと横になっている。
俺は再び味方だぞ、と鳴き声を真似る。
残りの牛の乳とスイートビーの蜂蜜をボウルに混ぜ、メスの顔の前に置いてやった。
よろよろとメスが立ち上がり、ふんふんとボウルの匂いを嗅（か）ぐ。

やがて頭を突っ込むと、牛の乳を飲み始めた。はじめは警戒していた子どもたちも、母親が飲んでいるのを見て、争うようにボウルに頭を突っ込んだ。
俺は洞穴から出ると、「もう大丈夫だ。これで普通の食事も取るようになる」と言った。
「……これで元気になる？」
ルクシャくんが心配そうに俺を見上げる。
「ああ、もちろんだ」
ルクシャくんがパアッと顔を明るくした。
「よかった……本当にありがとうございます！　あの蜂蜜は……売り物だったのでは？」
ガリウスさんが申し訳なさそうに言う。
「何、大したことはない。しかし……今回は解決することができたが、あんまり魔物を飼うのは感心しないな」
俺は魔物の専門家として、ガリウスさんに注意した。
「ガラファンは自分のテリトリーに侵入されない限り襲ってこない魔物だが、それでも魔物は魔物だ。いつこのお坊ちゃんが危ない目に遭わないとも限らないんだからな」
「肝に銘じておきます」とガリウスさんは言った。
ガラファンが元気になったら、子どもを見に、遊びにこさせてほしいとお願いしたところ、快諾してもらえた。リリアにそれを伝えると凄く喜んでくれた。
ガリウスさんとルクシャくんに見送られ、ベルエンテール家の馬車に乗ってニマンドの道具屋に



戻ると、会計はベルエンテール公爵家で持つことになったとニマンドに聞かされた。
おまけに丈夫でデカい木の板付きだ。
板まで買うと高いので、森の木を切り出すつもりでいたのだが、これなら森を傷めずスイートビーの巣箱を作ることができる。
ガリウスさんから話を聞いたベルエンテール公爵が、御者にニマンド宛ての手紙を渡してくれたらしい。
「木材は量が多くて倉庫に取りに行くことになるからあとで届けておくよ」とニマンドに言われて、俺はリリアを肩車しながら、村への道を歩いていた。
二人きりになると会話がもたない。
このままじゃ駄目だな、と俺は思った。
「リリア……お父さんがいなくて、寂しかったか？」
「……」
「今までお母さんもいないのに、ずっと一人にしてごめんな……お父さん失格だよな」
リリアは何も答えてはくれなかった。
「でも、これからはずっとお父さんと一緒だ。リリアに頼ってもらえるいいお父さんになれるよう頑張るからな」
仲良くなるには、まだまだ時間がかかりそうだ。放っておいたツケなのだから仕方がない、と

思う。
「……おとうさん」
ふいにリリアが呟いた。
「なんだ？」
「――おとうさん、まものおいしゃさんみたいだった……カッコよかった」
リリアが嬉しそうな声で言う。
初めて自分から、こんなにたくさん話してくれた。
俺は泣きそうになり、鼻をすすった。
「そうか、カッコよかったか」
「うん……リリアね、おとうさんと、ずっといっしょにいたい」
「……ああ。そうだな。これからは、ずっと一緒だ」
俺は鼻水を軽くすすりつつ、そう答えた。
まものおいしゃさん、か。
リリアが喜んでくれるなら、それも悪くないかもしれないな。

★　★　★

「よーし、それをそこに置いてくれ！」



昨日は街から帰ってきたら夕方になってしまったので、そのまま夕飯を食べて寝てしまった。
リリアと初めての食卓は、まだどこかぎこちなくて、お互いあんまり会話はなかった。でも俺が村人のくれた川魚を焼いて、身をほぐしてやると、リリアは嬉しそうにそれをスプーンで食べた。
こうして少しずつ、リリアと関わる時間を増やしていこう。
そうすれば、いつかきっと、リリアも心を開いてくれるはずだ。
日頃大工として街に働きに行っているマイガーの指示で、村のみんながスイートビーの養蜂のための巨大な巣箱を作る。
巣箱の場所は森の中の、村人が立ち入らない場所に決めた。
ここは少し飛び出した崖のおかげで、雨も当たりにくい場所だ。人も充分雨宿りでき、生い茂る木々が、風や直射日光も防いでくれる。見晴らしがよい場所であること。強い風や直射日光が当たらない。巣箱の上に飛び立てるだけのスペースがある。屋根があればなおいい。
スイートビーの養蜂をするにあたり、巣箱の設置に適した場所はいくつかあるが、基本、この条件に当てはまればどこだって構わない。
そして、引っ越しをするスイートビーは、元の巣からあまり離れたところには巣を作らない。大体一キロ程度。
移動してきてくれそうな範囲で決めた場所に、たくさん巣箱を設置しておく。
本当に来てくれるかどうかは俺にも分からない。正直気長に待つしかない。
巣から離れて分蜂（ぶんぽう）したスイートビーが巣を作ってくれるのを待つのがいいのだ。

立ち読みサンプル
はここまで

それをみんなに伝えたら、すぐに養蜂が開始できると思っていたらしく、最初がっかりしていた。しかし、村人の安全と、スイートビーにストレスを与えないためと伝えたところ納得してくれた。

スイートビーは、長い距離を飛ぶことができ、なんと最大移動距離は百キロを記録したケースもある。知らない土地にある知らない花の蜂蜜も楽しめる。楽しみでしかない。

いくつもの巣箱を設置していると、突然村人のアントと、彼に肩を抱えられた同じく村人のジャンが、「大変だ！」と叫びながら俺たちのもとへ駆けてきた。

みんな、手を止めて、なんだなんだと駆け寄る。

ジャンには酷い火傷（やけど）と殴打されたような傷があり、失明まではしていないようだが、片目をやられて目が開けられなくなっていた。

「街道に、ラヴァロックが出たんだ……」

その言葉に、みんなが一斉にザワザワし出す。

ラヴァロック。漬物石サイズのゴツゴツした岩石の魔物。

下手に攻撃すると破裂し、高熱を帯びた石をぶつけてくる、初心者の冒険者や村人が苦しめられる魔物だ。

多くは群れを作って、溶岩の流れる地下のダンジョンなどに巣くうが、まれに単体でこうして、人里近くや森の中に現れることがあるのだ。

本来溶岩地帯に好んで棲息する魔物だが、個体差があり、魔核（まかく）――魔物の急所となる部分――の熱耐久度の低い個体は、棲息地から離れていく性質を持っている。



これはオーバーヒートによる魔核破壊死を避けるためで、溶岩の熱に耐えられない個体は、中心部の体温が上がりすぎると、魔核がやられてしまうのだ。熱が体内にこもりすぎると、脳や臓器に影響が出るのと同じだ。

そして、移動方法は自爆。バラバラになったラヴァロックは、一番遠くに飛んだ大きな破片に向けて集まっていく。そして自分で移動する方向を決めることはできない。なので移動中の事故死もよくあるのだとか。

ラヴァロックが自爆する時にタイミング悪くその近くを通ると、いきなり被弾して、大人でも一回の破裂で死に至ることもある危険な魔物だ。

この村は街に行くにもどこに行くにも一本道で、どうしてもその街道を通らなくてはならない。破裂するラヴァロックに怯えながら生活することになるのだ。

街道の脇の草原は、この村の子どもたちの貴重な遊び場でもある。

子どものいる親たちは戦慄（せんりつ）した。

「スイートビーの問題が片付こうとしている矢先になんてこと……」

「この村は呪われてるんじゃないのか……？」

みんなが口々にそう言って落ち込んだ。

「だ……だいじょうぶだよ」

声を上げたのはリリアだった。

「だっておとうさんは、まもののおいしゃさんだもの」